

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:55.

自宅退院した脳梗塞患者の発症援護での生活習慣の変化とその要因～
本人・家族を含めた面接調査を通して～

田村 咲, 久保 友佳

自宅退院した脳梗塞患者の発症援護での生活習慣の変化とその要因 ～本人・家族を含めた面接調査を通して～

旭川医科大学病院 10階東ナースステーション ○田村咲 久保友佳

【目的】

脳卒中は生活習慣病の一つで再発しやすく、生活習慣の改善によりある程度予防が可能である。そこで今回脳梗塞を発症した患者が発症前後の生活でどのような変化があったか、影響を及ぼした要因は何かを明らかにすることを目的とした。

【方法】

平成28年4月以降に脳梗塞を発症し入院した患者とその同居家族（4事例）を対象に面接を実施し、内容を逐語録にし、抽出、カテゴリー化した。

データは個人の匿名性を厳守し、所属機関の倫理委員会の承認を得た。

【結果】

当院では禁煙、食事、飲酒、水分摂取について指導しており、対象者全員に意識の変化または生活習慣に変化があった。要因は看護師から指導を受けたこと、医師から指導を受けたことが挙げられ、変化がなかったものは対象者1名の食生活であった。

【考察】

変化を及ぼした要因として、1つ目に看護師が急性期の時期に指導したことが挙げられた。発症時はしびれや麻痺等の自覚症状によって衝撃や戸惑いが生じ、脳梗塞を発症したこと自体を危機的状況だと認識させ自分の健康への関心を高めたといえる。

2つ目の要因は医師の説明が看護師の指導をより強めたことだと考える。対象者全員が医師から生活に関する指導を受けたと認識しており、他職種とも連携・協働を図ることが効果的な指導になると考えた。

3つ目の要因は同居している家族への指導である。対象者は全て既婚男性で食事は妻が調理していた。退院後の生活場面を想定し、それを支援する人を把握して課題を見出し、具体的な生活行動について共に考えることが重要だと考えた。

次に変化しなかった1名の食生活であるが、対象者は壮年期であった。壮年期では健康の維持・増進を図りたいと望んでも、働いて多忙な生活を送ることで食生活の変更や運動習慣を作る等、生活習慣の変更は困難だと予測された。行動変容を促すには生活を想定し、個々のニーズに即した具体的な方法を組み込む必要があったと考える。